

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

バレーボールにおけるフロントとバックの攻撃パターンについての研究(2)

著者	吉田 康伸, 中西 康己, 重永 貴博, 今丸 好一郎
出版者	法政大学体育研究センター
雑誌名	法政大学体育研究センター紀要
巻	17
ページ	39-47
発行年	1999-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/4172

バレーボールにおけるフロントとバックの攻撃パターンについての研究②

The resrch in the way they attack patterns in front and back on volleyball ②

吉 田 康 伸（法政大学）

中 西 康 巳（日本女子体育大学）

重 永 貴 博（鳥羽商船高等専門学校）

今 丸 好一郎（東京女子体育大学）

（キーワード） バレーボール コンビネーション攻撃 バックアタック 攻撃パターン

Key word Volleyball Combinaton Attack Back Attack Attack Pattern

1. はじめに

近年のバレーボール界において選手の大型化傾向は著しく、先頃日本で行われた世界選手権大会においても男子は200cm以上（最長身者217cm）、女子は190cm以上の選手が数多く出場していた。選手の大型化に伴い、攻撃戦術は著しく進歩し、中でもバックのプレーヤーがアタックラインの手前でジャンプをし、空間差（前方へ空中移動）を利用して攻撃を仕掛けるバックアタックは、1984年のロスオリンピックで優勝したアメリカ男子チームが完全な戦術として、コンビネーション攻撃の中に取り入れて以来、重要な攻撃手段として定着してきている。

日本においても1994年に日本リーグからVリーグへと名称が変わり、外国人選手の参加が認められたこともあり、各チームともバックアタックを積極的に取り入れるようになってきた。

そこで本研究では、Vリーグ男子においてバックアタックがどのような目的で取り入れられ、実際にどういったパターンで使われているかに観点をおき、前回の研究（1995年度）に引き続き、ゲーム分析を通して検討していくことにした。

2. 用語の定義

トスの高さ、またはセッターの手からボールが離れてから、アタッカーが打つ瞬間までの時間によって各攻撃群を分類したものが表1である。

表 1 各攻撃群の分類

攻 撃 群	テ ン ポ	攻 撃 種 類
速 攻 群	第 1 テンポ	A, B, C, D の速攻
時 間 差 群	第 2 テンポ	レフト、ライト平行 ダブル 前セミ 後セミ 1 人時間差バックアタック (コンビネーション)
オープン群	第 3 テンポ	レフト、センター、ライトでのオープントス及びバックゾーンからのトス (バックアタックを含む)
そ の 他		二段攻撃 (ツー攻撃) ダイレクトスパイク

② WBA (ダブルバックアタック)

一度のコンビネーション攻撃の中で、二人のバックプレーヤーが同時にバックアタックを仕掛ける攻撃をいう。

③ F 集

フロントのコンビネーション攻撃のうち、セッターを境にその前方、あるいは後方にフロントプレーヤーを集めるようにコンビネーションを組むことである。

④ F 分

フロントのコンビネーション攻撃のうち、セッターの前方、後方にフロントプレーヤーを分散させるようにコンビネーションを組むことである。

⑤ FWQ

フロントのコンビネーション攻撃のうち、二人のフロントプレーヤーが同時に第 1 テンポ(速攻)の攻撃を仕掛けることをいう。

⑥ CONB 出現率

バックアタックに関する出現率で、コンビネーション攻撃の中にバックアタックが組み込まれた全ての打数を、全体のコンビネーション数で割った割合のことである。

⑦ 打数出現率

バックアタックに関する出現率で、バックアタックの打数として出現した数を、全体の攻撃打数で割った割合のことである。

3. 研究方法

① 標本

本研究の標本は、1992年度第26回日本バレーボールリーグ男子大会の予選リーグ戦のうち、VTR 録画した22ゲーム、85セットと、1995年度第 2 回 V リーグ男子大会の予選リーグ戦の12ゲーム、43 セットである。

②測定方法

本研究は、データを収集するために、ゲームを一度ビデオテープに録画し、後日再生して私案の記録用紙に記録し、集計した。測定した項目は以下の通りである。

・攻撃種類の分類

攻撃の種類（コンビネーション攻撃）をフロントとバックに分け、フロントにおいては第1テンポ、第2テンポ、その他の3項目に集計した。

・ポジション別のバックアタック

ポジションごとにバックアタックの出現を集計した。

・攻撃パターンの分類

一回ごとのコンビネーション攻撃について、その組み合わせによって攻撃パターンを分類した。

以上の項目について、コンビネーション攻撃の出現率、打数の出現率、また攻撃パターンについては決定率を算出した。

4. 結果及び考察

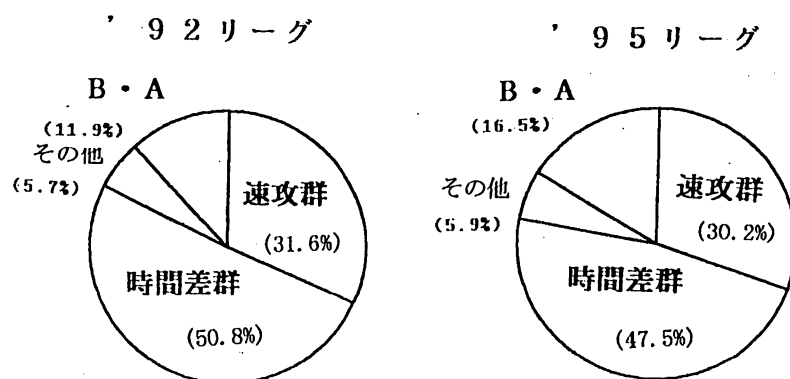
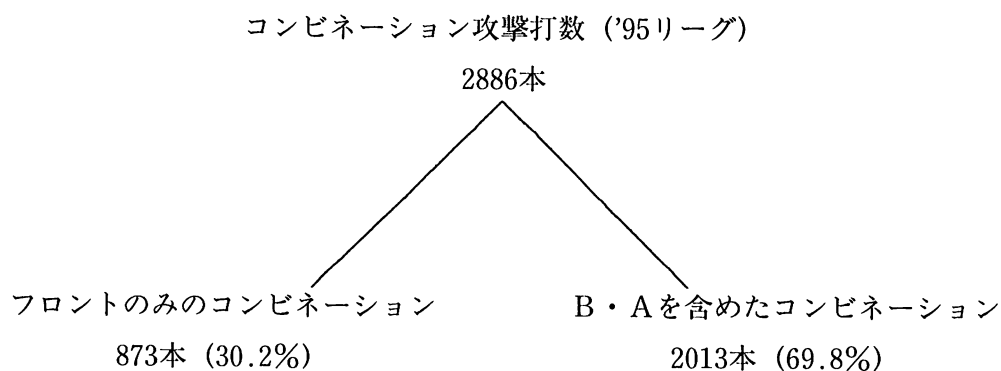


図1 攻撃種類



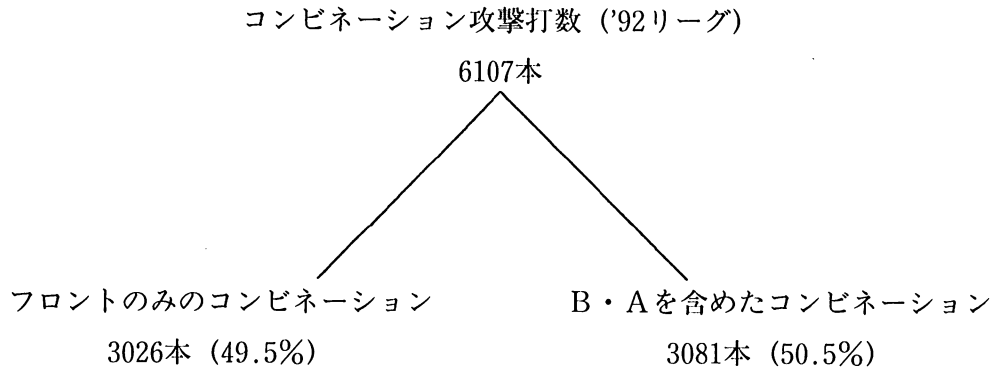


図2 コンビネーション攻撃

ここではVリーグレベルにおけるバックアタックの出現率や決定率などについて、'92第26回日本リーグ（以下'92リーグ）と外国人選手が参加した'95第2回Vリーグ（以下'95リーグ）の二つを比較検討しながら考察を進めていく。

1) バックアタックの出現率の各リーグごとの比較

本研究において、対象となった各リーグごとにおける全ての攻撃打数は、'95リーグでは4105本であり、一方'92リーグでは8415本であった。このうちオープン攻撃（第3テンポ）を除いたコンビネーション攻撃の総打数は、それぞれ2886本（'95リーグ）、6107本（'92リーグ）であった。図1は攻撃種類の打数出現率を示したものであるが、コンビネーション攻撃中、最も出現率の高かった攻撃は、両リーグともフロントの第2テンポ（時間差群）の攻撃であった。バックアタックの出現については、3年間で増大傾向が見られた。バックアタックは'95リーグより6年前にさかのぼる'89リーグでは、約20本に1本の割合(5.6%)でしか使われていなかったものが、約6本に1本の割合(16.5%)にまで出現するようになった。

また決定率についても'92リーグではバックアタックがフロントのどの攻撃よりも一番低かったのに対し、'95リーグではフロントの時間差群よりも上回るなど、フロントの攻撃とほぼ同じ決定率を示したことからも、各チームがバックアタックを確実にフロントのコンビネーション攻撃と絡ませながら使いこなせるようになってきたといえる。

また図2はコンビネーション攻撃をフロントのみのコンビネーション攻撃と、バックアタックを含めたコンビネーション攻撃に分類したものであるが、'92リーグでは、バックアタックを含めたコンビネーション攻撃が50.5%と約半数であったのに対し、'95リーグでは、69.8%と約2/3がバックアタックを組み込んだ攻撃であった。

このように3年間のうちにバックアタックが組み込まれた攻撃が多く使われるようになった要因としては、セッターの対角に強打者を配置し、フロントの攻撃者が2人の場合に、その少ない攻撃者の数を補う目的でバックアタックを仕掛けるフォーメーションが定着し（'92リーグ）、さらに攻撃の質を高める目的でセッター対角以外の者が、フロントの攻撃者が3人の場合でもバックアタックを仕掛けるようになったため、バックアタックを組み込んだ攻撃が多く使われるようになったもの

と考えられる。

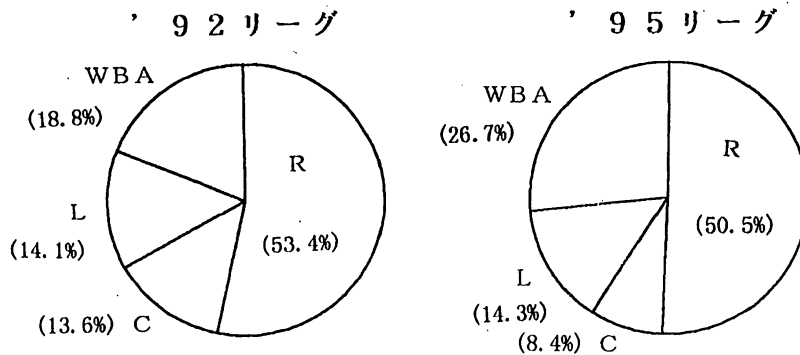


図3 ポジション別のバックアタック

2) ポジション別の各リーグごとの比較

コンビネーション攻撃におけるバックアタックをポジション別に分けたものが図3であるが、各リーグともにライトポジションからのバックアタックの打数が、半数以上（'92リーグ・53.4%、'95リーグ・50.5%）を占めた。このことは、フロントの攻撃の組み合わせがレフトとセンターを主体としていることが多いことから、レフトとセンターに相手ブロッカーを引きつけ、フロントの攻撃者のいないライトポジションからのバックアタックが多くなるものと考えられる。その他のポジションについては、一度のコンビネーション攻撃の中で、二人のバックプレーヤーが同時にバックアタックを仕掛けるWBAが、多く出現するようになった。バックアタックはセッター対角以外のプレーヤーも積極的に参加するようになったといえる。

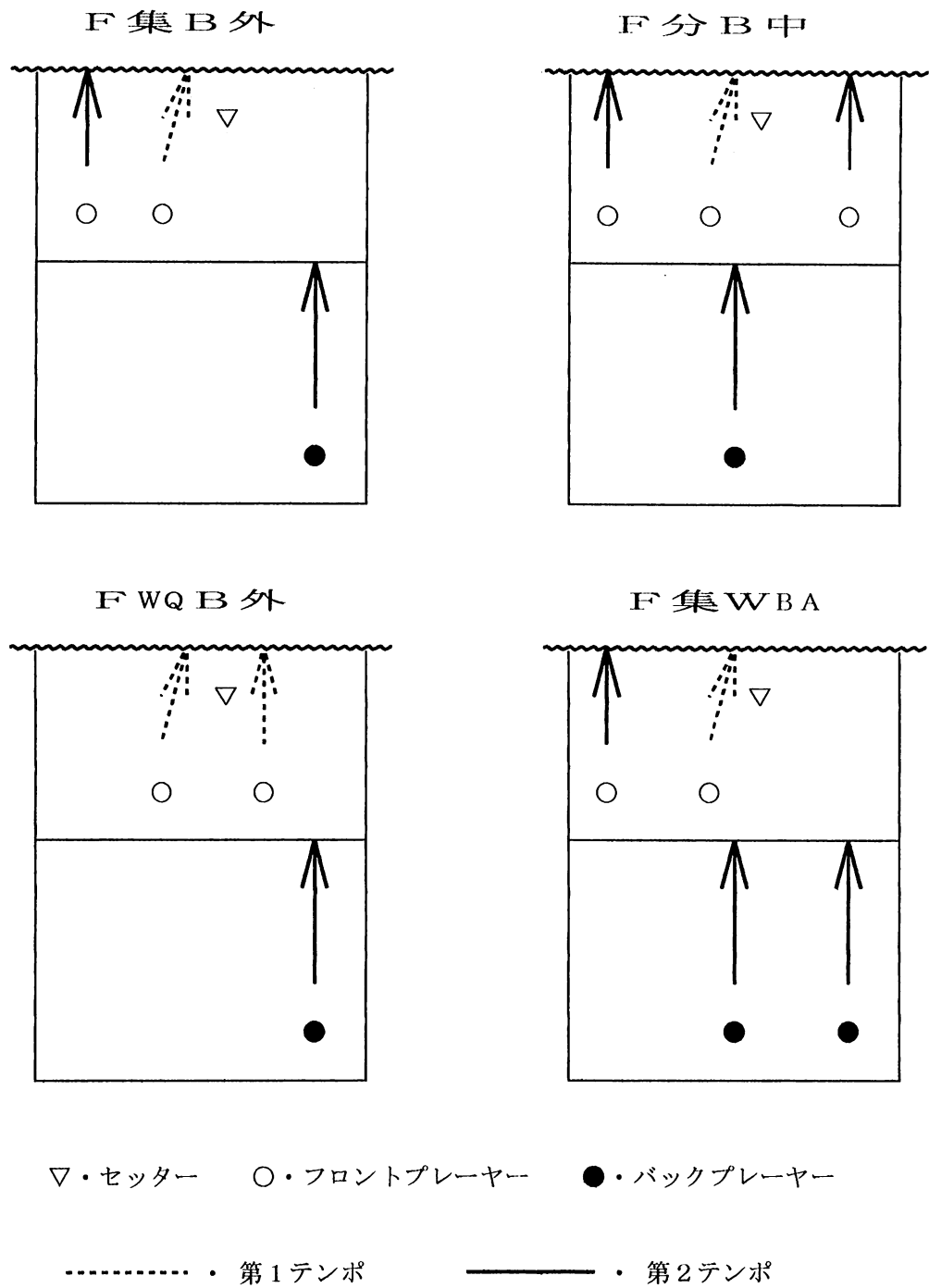


図4 攻撃パターンの種類

表 2 パターン別のバックアタック（決定率を含む）

'95 リーグ	CONB	打 数	決 定	C出現率(%)	打出現率(%)	決定率(%)
F集 B外	1272	267	148	63.2	56.2	55.4
F分 B中	269	40	24	13.4	8.4	60.0
FWQB外	144	42	24	7.1	8.8	57.1
F集WBA	328	126	69	16.3	26.5	54.8
計	2013	475	265	—	—	55.8

'92 リーグ	CONB	打 数	決 定	C出現率(%)	打出現率(%)	決定率(%)
F集 B外	2078	477	241	67.4	65.5	50.5
F分 B中	406	94	41	13.2	12.9	43.6
FWQB外	120	20	8	3.9	2.7	40.0
F集WBA	477	137	65	15.5	18.8	47.4
計	3081	728	355	—	—	48.8

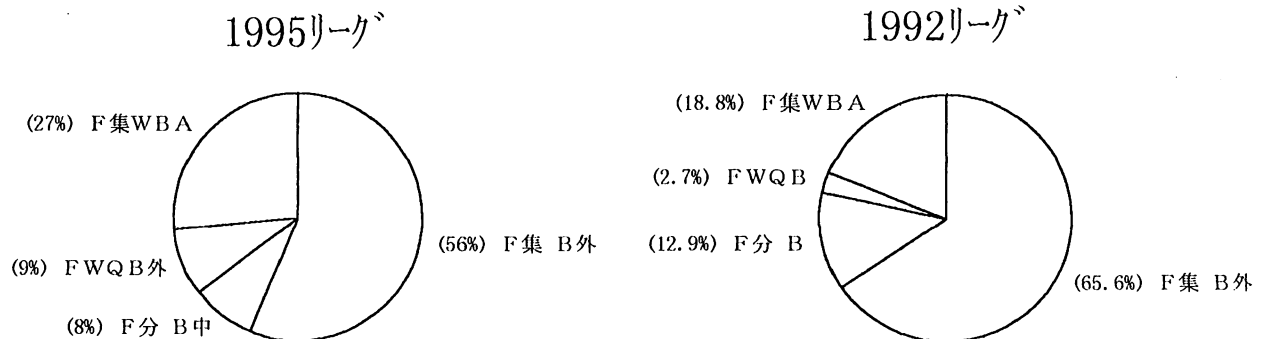


図 5 パターン別のバックアタック

3) パターン別の各リーグごとの比較

次にバックアタックのコンビネーション攻撃を、パターン別に分けたものが表2、図5である。バックアタックとフロントアタックを合わせた全てのコンビネーション攻撃のうち、フロントの攻撃者をセッターの前方あるいは後方に集め、その逆サイドから仕掛ける“F集B外”が、'95リーグ・63.2%、'92リーグ・67.4%であり、打数の出現率も各リーグそれぞれ56.2%、65.5%であった。このようにフロントの攻撃者をセッターの前方あるいは後方に集め、その逆サイドに空間を作り、そこからバックアタックを仕掛けるというように、バックアタックを十分に生かすことのできる状態をフロントで組み立てながら、攻撃していくパターンの出現率が高かった。

次に出現率の高いパターンは、両リーグとも“F集WBA”で、'95リーグ・16.3%（打数の出現率は26.5%）、'92リーグ・15.5%（打数の出現率は18.8%）であった。このパターンはフロントの攻

撃者が二人の場合のみに出現し、各チームによって全く出現しないチームと出現率の高いチームとに分かれた。

その他、フロントのコンビネーションがレフト、センター、ライトと分散して、そのバックゾーンからバックアタックを仕掛ける“F分B中”は’95リーグ・13.4%（打数の出現率は8.4%）、’92リーグ・13.2%（打数の出現率は12.9%）であった。このパターンは、フロントの攻撃者が三人の場合に多く出現するパターンであった。

またフロントの攻撃者がダブルクイックに入り、その外側からバックアタックを打つ“FWQB外”は’95リーグ・7.1%（打数の出現率は8.8%）、’92リーグ・3.9%（打数の出現率は2.7%）であった。このパターンも、ほとんどがフロントの攻撃者が三人の場合に出現するパターンであった。

このようにパターン別でみると、両リーグともフロントの攻撃者をセッターの前方あるいは後方に集め、その逆サイドからバックアタックを仕掛けるという、空間を使ったバックアタックのパターンが多かったが、’95リーグにおいては“F集WBA”や“FWQB外”といったその他のパターンが増大傾向にあることから、各チームとも多彩な攻撃を仕掛けるようになってきたといえるだろう。また上記のように“F集WBA”、“F分B中”、“FWQB外”のパターンはほとんどがフロントとバックのプレーヤーを合わせると四人が攻撃を仕掛けており、“F集B外”のパターンにおいても’95リーグでは、フロントの攻撃者が三人の場合でも全体の30%程度使われるようになってきていることから、相手のブロッカー三人に対して四人が攻撃を仕掛けるという複雑なコンビネーション攻撃が数多く見られるようになってきたといえる。

次にパターン別の決定率を見ると、’92リーグでは出現率が高いにも関わらず、“F集B外”が最も高かったが、’95リーグではどのパターンもさほど大きな差が見られなかった。各チームが確実に色々なパターンを使いこなせるようになったということだろう。

5. 結論

以上のような結果から、Vリーグ男子においてコンビネーション攻撃におけるバックアタックの出現率は高くなり、またあらゆるポジションから出現するようになったことで、バックアタックを含めたコンビネーションのパターンが複雑になってきたことが明らかになったが、その中でもフロントとバックのプレーヤーを合わせた四人攻撃が多く見られるようになった。したがってバックアタックをコンビネーション攻撃の中に取り入れ、幅広い攻撃をすることで、戦術的により効果的であることが実証された。

バックアタックを使う目的が、今まではフロントの攻撃者が二人の場合に、その少ない攻撃者の数を補うというものから、その目的以外により決定率を上げるために、攻撃の質を高める目的で使われるようになったといえる。

本研究は、Vリーグレベルのチームにおけるバックアタックについて、出現率やポジション別の

出現頻度について調査し、それをもとにどのようなパターンでコンビネーション攻撃が行われているのかを検討してきた。今後は後衛でのリベロ制やラリーポイント制の導入等のルール改正により、選手はオールラウンド的な動きよりも各ポジションでの専門的な動きが求められるため、WBAのような複雑な攻撃は少なくなるかもしれないが、バックアタックの出現自体はさらに多くなるものと予想される。

参考文献

- (1) A・セリンジャー：「パワーバレーボール」ベースボールマガジン社
- (2) 福原祐三 ほか：「バレーボールのゲーム分析―サーブレシーブからの攻撃―」
日本体育学会第30回大会号
- (3) 池田久造：「バレーボール ルールの変遷とその背景」日本文化出版
- (4) 松平康隆：「バレーボールの戦術」講談社
- (5) 都沢凡夫 ほか：「バレーボールにおけるゲーム分析」
日本バレーボール協会研究報告書第4巻
- (6) 新谷宗一：「バレーボールに関する理論的研究―Tacticsの構成要素より―」
日本体育学会第34回大会号
- (7) 朽堀申二 ほか：「バレーボール」泰流社
- (8) 吉田清司 ほか：「バレーボールのゲーム分析―'84女子4カ国対抗におけるポジション別攻撃パターンについて―」
日本体育学会第36回大会号
- (9) 吉田雅行 ほか：「バレーボールの各ポジションの勝敗に影響を与える技術」
日本体育学会第34回大会号
- (10) 吉田敏明 ほか：「バレーボールにおける勝敗に影響を及ぼす技術」
日本体育学会第36回大会号
- (11) 吉田康伸 ほか：「バレーボールにおけるフロントとバックの攻撃パターンについての研究」
法政大学体育研究センター紀要第14号